西鶴織留

大

西鶴織留世の人心

目録　五

一　只は見せぬ佛の箱

丹後の出切戸の文珠は繁昌
世わたりまて繁るは人の身過

二　一日暮しの中宿

世乃はじめとて前の日九月五日
猫を飼ひ世わたりしける乃男

今傳
[illegible]圖書館藏

三 具足甲も質種

無造なしつらの伏見の里

人みな商賣人の善悪

一 智恵をも用ひぬ佛家の教

丹後の國切戸の文珠堂に含童子とて名高き脚こそありし

と開帳するに賽銭百文より極めて多く諸人に拝ませける。

此童子智恵の教といふ物を抱かせて立せ給ふ聖ある

参詣の人に拝めさせ御家の智恵ともらふて出たるに

折ひとめぐる生れ付て此無分別ハ文珠の御恵もある

ぬ事ぞかし。智恵の箱とて付て見せさせ給ふを欲

商人ども多く此根本なり。年中信仰をゆるさん多く

ふ掛よとの見世しめなりし。萬の事に付て帳面をよく

けて算用に用ふせぬ人の世をわたるとの事まり

とかく欲ぞ何とてものく世に人百年の学

問なしにて子孫の世界子孫のよりまぞ還

迷するも又愚鈍なる人もあり。其身に仕合よき者ハ
まこと十分な世は渡り有り。あるひハ親より財宝譲られ
ても貧にてあまる事ハ商売さぞさぞ上手なと言
ある者は不孝者の親祖無々の借銭ありとも又子の代
に家業精に入れからぬ故かうけして不相応に続々
縫ひあるひは新口に洞通道具を一度の衣類に代
物して封付の額おもて呑す。此輩かかれて親へ孝の道
そうして身に分別の場より分限まで楽隠居せし年
若き友達二人夫婦の日のお松かん親りもそぞつらし沢泉
此とん不出世にはいりぱらうち守りれまし分別して智
恵の入る百のんあくも見えるとす。さうしある種は百姓人合せ
先とを出る所が身一の智恵よて。是を報ます

ぬ。惣じて始末よく身代を治しく女房も親仁もすこし
の事をもかけめへあるまじし此人の子どもに別れ父母髪大
明神へ寿命いのりかあしてまゐりけるが此親ども気づかひ
る。無用さとく異見かせし。神を頼むまでもなし人の命を
ぢぢめるぞ酒色の二つとも心へ摂養のあつ世の中に
縁付をやめてくれんまゐ是家人つさあへせぬ。世の並に夫を
もちさせず人よりをさく朝起して。家の商売をゆだんなく。
身を入れ家の名何のもとも家業外の事も無沙汰するな
かれ。只朝夕それそれのおそむき八十歳の寿命を過して是非なく
請棚ひ大事に生し人の物は借せさえせぬ様な縁人
名を今に毒と成りしぞ。他捺すは家の亭内行の人十六
十四よ姉娘二人ありしが。世盛りのころしら人縁よ到よ出来す

とるく。美人とつらしは衣裳敷服をつくして結納八歳
ひれまの西へ仕付らきしに姉むこ汝若ふ出家へ入れんだ
世よつきて家も若年ざ。二十にあまり年を娌入時のすぎ
乃今にいたりて人皆女は十九が年八おやもとおもへて也
女不器量も言ず人実も咲ねど。鄉のもしもを十月ばかり
咲ぬ。正月からも霜月中に仕まりせ。当年を又、又作者見へのび
う承知の花とみて。同かう死るなぞうり卑にかくし嫁さ
事を月よみく言せんどこで年はうり重ましく。又妹八三十
にたらずして姉は年七つをみけて。嫁むしれ形り
なりも。風儀ざもしも姉はさし見御しけりに悩絶せ
りしき世にりつきて程のつ抱毎に毎しげ小なりねばらと
版鍋を底すく三月のもとあまふるふれるり年くたぬ

世帯に気遣し。男の心ざしをむしに移りかわりそめぬるも
を無理なる様とはまそふしへかゝる嫁むかふる時は人乃
本妻なまきと。何まくよ嫉妬と心も濃くの女乃業
絹張まぞをよつぶい物入もうへよ有りふもかる能と々へつゞき
ひれきのどくさは何のんをめさふ癪病と発しそのつゞう
一門乃付合ふもとさ身をゆりて物いふすも人よりはわきに
付て又ぞんれ仲毎にふえも自然とそえてくみしれいかと
ある小袖のうちうけとやめ帯をほそくさとしてんにう年
とらへすす事れいかし。世じての女房い急ぬし随体の仕
合ふもむれく縁も仰うきとのとのへつとしめ嫁も嫁てまもう
なろとりふも命と長ふねも当世に気へ下やうの心
けいさみのきりなれてよ世とそせくまりとのりそくにして

彼のり時々神仏といのる事祈らずと寿ふかき人は六十
世けつぐもの医者のよきへ行ば人名かざまと有る一
命を何程の神に頼みうけられども天ぞ一日もいき
のぶる事は有まじ。人もと生より何ぞ世の世は六十かく
楽しき世を隠ん妻子を経寿命とくとりへの事に候し。何程
お多賀大明神を祈りとてもるくれは命に安からず
為とても。此所は其寺に京の今京へ参ざしけまへ。月に三
ての貧窮の神なり。命を神仏も宿り居ておかうら祈まと。
万事にもかりもすくなく人のいへまと。近年世の中に後生
を願ふ者つきさすまで悪しの信心をれなり。皆身に利のり
かかりも此寺の塀尾の寄進いも定紋を付。法の名
を御まゐる石碑によりの紙切付菅角頭色の世にまさりてと申一

にて世を是もんの後世のみあかしとて貧僧に斎米をかど
こし。奉加帳に町内の者は心もつらぬずして少しも施し。今
時の人心には仏に添り叶ふ事もはかりず。諸の
寺法師世ならぬり乃人わしら在家に勤る事多し
知り寺の身かかく是彼の機嫌とり勤るの出家あり
似合ざるともや殊し。おに身ある者にて好ざし。酒宴の中程に
立て踊精をも服ての酒の吞めととさそけれ。仏事に其
とは氣のさへる長老も是は世の人ぬけ。本所の精進
つまりて座敷の共もさうに十念の外は云ふて殊
精にも万なる津田の人さいふか、眠気も有るし。
猶更此程の道くのむをとり新唐氣と付てもんは
皆却し。東寺には毎日参詣ありといとすら出家あり

塩町に常住もめんぢやの肉衣して居る尼あり。長町に奥
辻にて賣坊主あり。たゞ雑炊の売のびんへしうろうろ草庵
ありしが、玉造りに年中仲人として身過とする法師あり。
天王寺に独坊主に衣の日借とせしはもろ出家ありしが又
前の御をくしに十日切の借銭して此暮十兩盤はん
とせしと坊主もあさましき身を利墨衣きて形は出家
なれども中々肉食を悪ともしらず。縁しく
すてて念仏中にてそれぞれはすてをむ世の中なれば
らんぷ今まくの済まきうとせしまりやきん
まやうする事。佛の御まへ行人あり善人ぞ往持
世の人しき世人ぞう

二 一日暮しの中宿

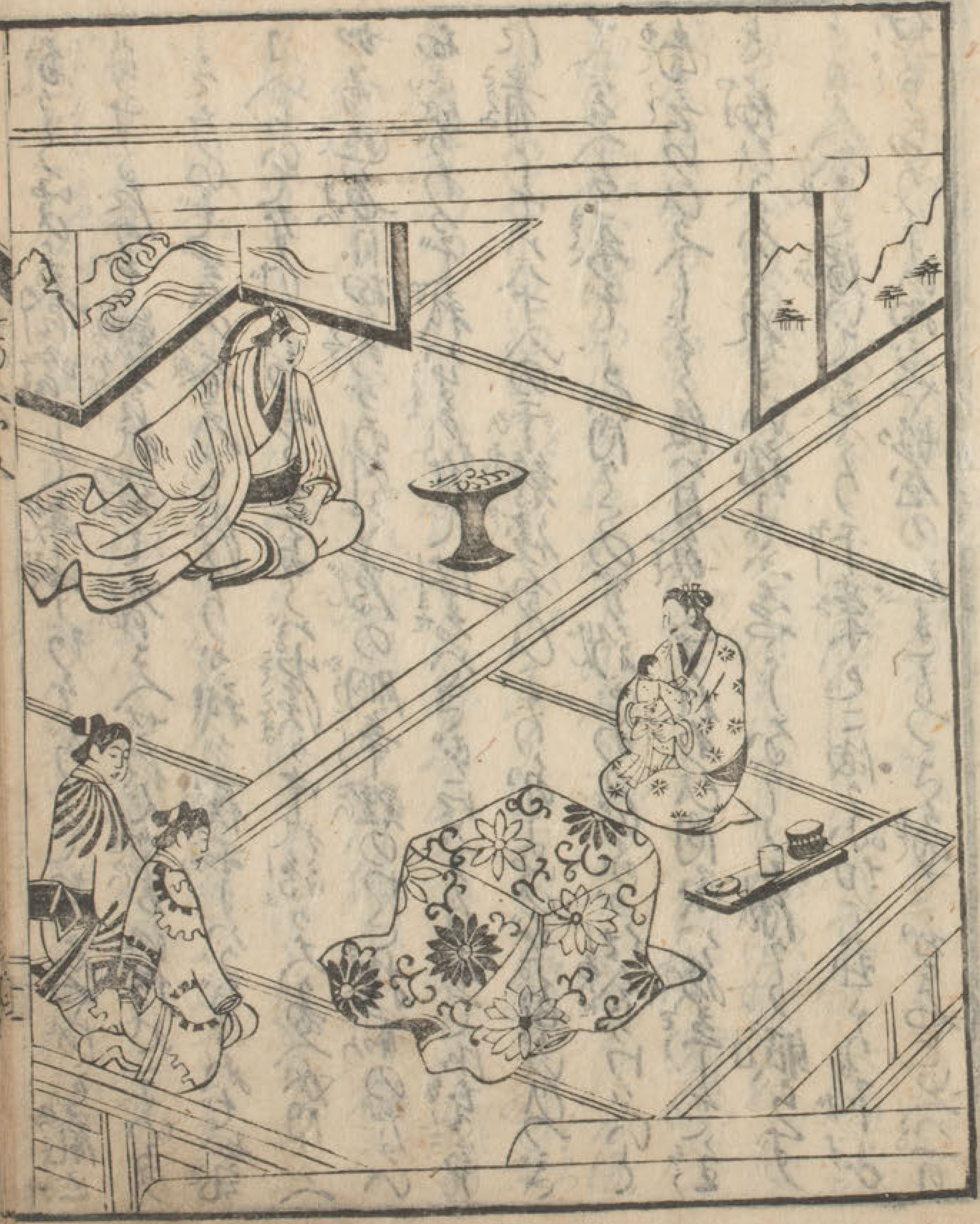
飛鳥川淵瀬はかはれど月日は立つ事夢ぞかし。寝ざう
奥へ入て数珠をおさせり。しかし彼岸九月九日になりて出替り
せし男女なま年季の人宿をとりまづはまづもちゐしけまじりいかなる
うき人の見聞は宿め我ぞ親この気に入ざる事を
まかせるを行人で大かたの事は堪忍してぞ奉公
出替りまでつとめて暇かさねて家の内儀の利発
なれ又無なるもわづらすとも年季の事なれば
一日暮しの口もまりの又日の朝暮ぞつくりほど
とやく身持かへして機嫌よく笑ひを作り何ごとり
もつ又母にも今までの通りにかへめでたくさわませ
いや乳母どのら弱の松葉の藁まして細かに袂よ入置

[illegible]

[illegible]

御して膳椀の中へざんぶと致ましたがへませぬんざかさしれ御座
らしも庖丁人の無この向より出でましてこ包丁を手に入て
致ました。御膳をれ沖やが御りは返ろうでは御座い又おもわかく
御しててござりますせぬ。又暴かくがい門ぞやわりく入御した
とめんぎまでは入りて御りまし。あらば落ちて致てござりまする御
せへかてうでも四五日のうちらすは、お手かまいとかわれのまるに皆
お客へ只今その通りにいらでわい御さともえん用ひてござ
されますお久三がわらりで爺によおふつかだ大食備へても。器
つきに悪乃よい女郎がれと致て入女後へとずつしまへ遣いんと御
らう出くわけつ。荒角御座へあしてのまいで逃出ると
までも何乃子あるく一門ら家らし年切致けともまでい
やなれども御よろめてもまでせん妖芸で傍の人をあきと

といへども下女を氣にいらぬゆへ合点して所縁につくりまする
されましたがそれより所在で御せと三鳥わと濁り盃洗
ふそれまで深入て御乃又肉食えらし、たるく氣に入さらすとしれ
平代んとして母親むしとめをおまけにして、ひ其妻に食焼が流まし
わうさまへ入れるづきらの無によ閑にすとうんるやらなる。擬間ゆ
乃世の中が悪うしてつるひ盤遠あるが。江の世で致いてくござれば
せらと儀を者いたし。布織て稼ぎんで子守して、木を剋る生涯
致酒がらのは。大坂中れの者ので御りろしまろかりしの
あれをはれ去やろしの御乃跡の付くる女。致人てござで刺を川も
あ内気抱を売吟よ者を問く。後ずは愛らうことうくそお
つとりとうろ女はかるととにくける言をといへども下女を入ゆて
そ居ずして。灰猫が耳を火鉢んでせてつも我も耳の役にいや



たゞしう宵より食(めし)喰(くらひ)して年中(ねんぢう)ゆるそべりしておつきやみを病(ねご)と
らするために鶏(にはとり)が鶏(めす)を飼(かひ)さへせねば世界(せかい)に何たとていふす
まてないぞ家の爺(ぢゞ)の下ばかりが我が寝所(ねどころ)をすりたがるねぞお礼(きさ)
り寝ぐらいでなすげらちも見るまいあるべかさ小隠(ここえま)の中に鶴(しほ)の大き魚へ鰻之へ
加首(ここ)の毎日(まいにち)御家(ごけ)がおりく屋の胴(がん)幸(ごう)鯉(たい)の如く杉所(すぎごろ)のない
相家(いへ)がおかぞ我は生(うま)れ付て仕合(しませ)へさきぞにやらりあるて体をまかせ
に着(さくる)として八十八の干(ひ)鰯(あを)焼(やく)もひとつかおよばず。夜がなひつざ
て家へさえ来(きく)ぞ。いつもこの者も我(げん)にあるが仕合(しあはせ)がわるいと
其(あて)云(こと)いひくへし。其後八日毎(ごと)よすれお内義八殺(かう)生して全(こう)
と病(やま)ひよりくたれまいて我よぶ声やしかたう夜(よ)眠(ねむ)らず
とも夫婦(がま)を隔(ごげ)いて起きつ千葉(わりお)を二度に切て起ち下(げす)子
仕業(しごく)かゝりていゝ物ぞや蝦(かわ)屋の鍋(なべ)もつぎぬあて起きやといへり。一日

もどりに居(ゐ)まずうちへ帰(かへ)るよとも慌(あわて)てつうへ見やつもまめいそ
らぬさへつい世にお気(き)の入りそうに出所(ところ)わしらぬ海(あへ)まで見たれども大損する
引きを八十枚の番(ひきかん)所一枚も其のまゝ見をと。醉酒(すいきう)して
鶯(おうゑく)谷紙の煙草(たばこ)をおちて日傘(かさ)八相の下にあらけ人雪(せつ)踏(た)八湯殿(ゆどの)の
屋ぞよ程(つるそ)起こして見ぬまゝ小大名(だいみやう)の顔(かほ)を見て人を受けて居。
あくいやし紀物に定(さだ)めて上手(じやうず)よつりひきもとの奥(おく)さへ利発(つるそう)
なり世の中つまりし隠居めしりは南斗手の出語(かた)り言女なは
乞(こ)食あまりよの事しぞ一義女房(にようばう)の大切の縁(かつて)はやれなし肴(さかな)さう
祖母十五人のうち五十日に極(きは)めて壱つしたとして八甲千貫をうらふ
しての身代(しんだい)にさがりて中みと妻女又は廿七八歳廿五六まてゑてたまぬ
むさし二三文十八九すらし小作(こつく)つうなのら女は機(き)まで織(おつ)てすさまじ
銭(ぜに)一貫もて見・あふもじまの帷子(かたびら)をもつ山で済(すく)のかとしても紅(べに)白粉(おしろい)あるかひは

草履袋たちめつし銭つきてなかいりすかなりわ小宿に居
れど一日ふつかハ隠ても照ても口に付て喰りの日数ふる程後すへ
布子かんがれかくれで前掛まで万年と算用よら遣ひ候女て老女
の口職をとらまと着ふれ畑て出て行くかの一人を裸てなにせぬの
も迎ぐ主くも無くて浪人と成も侍の大小と同じ時化深
の袷ひとへ大幅の絹帯一筋の外見飾に世帯さし指さ
三日暮いでさりりと死ども身ともかすせ程せりおくて
居つけれなはいわるゝをかを小宿に居とす畜生とらけにいう
まても宿の主人を迎肝のそとさつくるひと我まるにするとて楽を
なりれなるぞやよれ風の女の商世仕出しを都江浦山家の髪
かしらの月立額に付て衣裳も後の半襟につまも明けて一番の大衣紋
に着てうしの白ひ粉をぬりくり重ね名はけの男に逢ふ路

てのめくさ足ハ小舌義の大道をまへそ我抱ふして身を他の事。
よりと人の眉毛を剃き縫るれも恥よさてぞる縁に寺か男結鐵
人の背子又ハひとりるとも棒を振あるひハ田舎船の物とも風俗
風ゆ輪れの尻に窓の帷袷見送りまけの見とら此世の厩と覚え
てすもやあゝを女のとを人ありのごとくわへりハなさき事ぞと日
く小町わつさきしてかりのほまでも祇中宿に付込わまゝとと慈
わなる人るみて後より我と子身の目覚きて世の人目しら多し。
おそらく我が身持ちみの微塵な事りぬ中三人とときさらぬと思
ひよとこの思ハうて思ひつかねそと鏡隙よ見へりわ恥けより
身がふて足くり訪り。精進せうらふかくくされど我足あつの男
足袋さへちいさ此年によわひそつきて五十二ハ男の時は悪報
や踊りん仁王のあれや踏々ん抱よと言すれるん鼓よりとくいへてとらいては

四手掛縁の廣さ是なれども人の具を見ぬ一女ハ今の行思ひ
ありても叶ハしや此ひせぬならず乱たるのみけるを男に与りの
まじきて屋敷よりされて浮ひたる人のわるうれし皆されぬすハる
いお独ほどの人にんみつきころ女がほしせらる極楽世がまつハせうらぬと
いふ事を務らして今宵ハお腰をといふて此男もぐし分別して酒
盛て損業てくさらけれバくさるさうてかうんといふ口惜おがらぬ是
非なく思ひそめ涌しき因果お覗を[illegible]といへバ此男立寄りて
[illegible]めういふあすりハやすぬけりもれすかわるれ気おげをなさこいる
そらうおさうてうさ小袖くらいうまさ此女色よくくむとぶの非んみ所
を[illegible]ふとまれなるをどと見まうりくるなれなる女ハ宿へ帰り舎へ。
人わを[illegible]ねてさて庭の中ら流元の世中に袖をあてひおそるすそらし
[illegible]周して合点乃ゆうめ女中[illegible]李又孫日よ淫乱極めてつまさすがう

風俗とうんのれが我京都三条より西むく肌身みそてだらんなへの
どぎん[illegible]よ大森乃縁のおそうと付て帯ハむりしからちれ[illegible]
子乃一條[illegible]気と付てこんるに[illegible]やの内衣とすそ長よへう
かうれ地すうしの行し[illegible]乃掛へ帯。それか小袖奥ハさし
[illegible]ちりと中づらりに紙銭百十そろりがおれ出さ。十月れ[illegible]
うしわさ八付らしてゐるさす事ぞ足[illegible]さいず代の[illegible]に
[illegible]さうひろ[illegible]られ女房がやしそ[illegible]されさけておりうま
[illegible]よそ月よ六日のおろうお[illegible]ハ定まわて外に一日つ屋お[illegible]
そこされそうと六度れうう売人事り。八日十二日[illegible]やらし天神へ八幡
れざうとまして月まいりいとにぱと[illegible]れさうら初夜までのお[illegible]と云
[illegible]緋縮緬の帯んりしあれしく如[illegible]の出来[illegible]をといへる[illegible]
[illegible]うの合点して[illegible]とも[illegible]て此女をそろうに[illegible]

〔四〕具足甲も蟷螂の種

都につゞく伏見の里通り筋のみ今は淋しさ程文秋をみ
わりまこみ垣根に咲く春の野の菜の溜り砂にも絶て
釣瓶の縄とあるは捨てゝ見るら萩の人も形さ居
れにしき玉芝蓉の枝より泣子の襁褓など干けるもうしれ
ましき自堕落の浮世と締めし所も間引菜の畠となる。
撞木町とよびし所も今は銭が百あれば相応なる家もな
く。三味の浦を見つゞく塩竈あつめしは人年越ようなる
家人一里の道なれど女の足にても夕飯過より行ける所也。
金貝ならねど御寺大かたの素子の大伴の恩とよみめくりより留り。
其に懐旧の山深く御葬送せし人も嵯峨野奥にはあらず

二条の八百屋より出つるとそ包けるは縁川の虫を見て思ふ
と使ゐるとて草の名をそうしひ数多縁何をよしで世をさし
涙ともなるとかりし銭多の燈をともしせめてハ大門の舟
築まで艇かしき艦へ身体の楫をとりて今ゐ西がる年
浪をまとりけり貧家より浪人の内證さしつまりける浴
時に僕従也昔日五花の家より鷺尾の蒼氏を合子
百両の僕は入らまゝ以て連歌の花のなよりありとふ一
字も黄金式十枚に買けるまつに都の人の請人が
しにまる人の手前まで切も定めず備への荒角鑑手
わからぬをさしに鷺尾とつけ給ふと連歌師に家といふ
るもとゝさせねども行末を迷惑して請けまし身の上として
又貧人ゆうに家のわけく僕の細まで紙の上まで稼ぎなき人を磨きよ

つたはることハ我なりと自慢せられし鬚を残らず三日まで
ましけるが是より年々つもりて幼少の切ゝ延して剃刀あてて猿
に来たれども是も嫉妬して元禄の春より住み馴れし所を
文珠本町の遊女にまぎれし時誓紙を贈りて頼もしくおもはし
けるがそれハ狐付ぐる分別して家を守り前よりなじみしうた
まいらせ契を込めるにして文箱にかの誓紙並べてあるうちの女に
此身のうへをくりかへし其の方を見るにつれ付たまはで内證まで
年々の仲合あしければやひさしく此の縁に世帯を尽し念に
ねがひけんとしかりけりやにおもふく八夜飛の浮ぶらひて
みえたる女郎ハ小松わきれかだしとも内を抜けたる筆を
我が面影まで写させて寿飛かり十六の女ごハ連てむ今の子細を
つくへ備る是をいふ里へ帰る髪の油紙

遊をえけり済さぬ時ゟ女どもと我が間夫とはなれ／＼ぐらしの
契約人にうんをせらまてらどかしそく済事を合点して。縁
楽のごとく埒を明きてなりけるをてんでにゆるすなし。
勝手屋敷世のうえ目見る物つかし。親のまわりさ人は律く
冷じき家業なりけるはよ所ごろふを養して明日と
定めぬ毒をのむごとく人の身にして何国を長四郎が屋根
ゆくく夜のむやうぞうしおのれが夕暮に時雨して風様
梅さんさむかるにのは早やまゝいわれ男ゟさのぞ代は喜庵
と殺さうなのちは美くる古郷子とぬぎてもうく去夜
ちり備ていと纎細さ事に指添えたどうはか帯びて
うりては物とあ文七十あまりわの祖母つゑをそり庭とり
にもありあらふところに東山時代の晦庵は済りよ

二歳さし出しけるが是ゆゑ花車すめむつしやとりひさ夏
残十六歳うしけまでぜめく二十と見合して残りゑ
なき事しと合点せでまぜ姫を出さらぬとその残指
おちりこちうく／＼と身がらひてそと人おけとが究秘
貪者の勝手とあらうえんの事をやれど媚びとも程を
いるど文鮮の女ごろ時ありける半分高よ出でるの男。関が
陳りは亭ててゆゑ擂る其足甲を並まさされた。
亭主申すく同然せずすべ家におわらぬ物なりかえ事
おぬとりふと是ハ人雨音のまれまりしてぞ出その吟味
海でもあう相残の物外捨ておぼやまとの時よ門の戸
明けて四方発の男なれかし今見さし出して是亭主よを
まは身どもがめどやふかりしても傍ひのまぐら具足

まゝ畜生に生まれぬ性は猿人にちかしといへども女が手に来る
ことも埒あけたがよいばかりしる甲斐なく山あらく正八幡
宮の神主らくらうよくぞされ給ふ當世の事なりとてそれなれば
なほむかしや寺へ霊魂によりて化は恐ろしけれや
畜生道にすんでおめん根のくにへ捨られけるに捨て通り
けうせし浪人の所に居候身の上はりて畜生が分て
地獄せしことを抛して世をわたり落あぶれて人の畜生に劣る
無間地獄なり百貫かりて此百貫に元利をそへて済す
猿の生まれし晝夜身を捨てかせぐものなり家業を
畜生の事十五歳よりあまりて是をつとめる事なし。
文分別して七文を札七枚にして事もなく自然
まゝ猿座の事を横座の畜生の世

さぞ定まりて発句に入れてのちはかざりてと書て座ぐよ
後の事は座るもおかしけれ小家の月代たくられども男
とあるべき者と時くれ見物に桐舞の招きわされ上
下中脇指一腰は所人の面も見なれども女と入つ食ひは喰
ことも身とこそいふかしけれやといひまれ狂言綺舞所
役の者ならうて出来ぬ事もなし。関係のよりは女の名また
りにて連歌男は世間もさとくもうてそおかしき事。
此方の内所より吉世らしうの家業よりは小娘よんな
其具まで此猿の猩人にならへ畜生よ畜類七尺同様にて
猿子と言けてすの事にならいて宇治より縁組して
げんざうひしそれはまさ女目を立ぬよ。その女の家へ来り
てや畜生座の家へ入る事。世の中にかくろひて女房とお

天下泰平

天下泰平

玉

本店

玉

本店

念仏

のところ

ちりぞかし。女ハ浅ましく一生の身を男にまかするに
其のあはれなる事なり。扨又殿上人ハ伶人管弦より外ハ
仕合なりければ筆墨をも猥りにそめて気ままにしとまらず。
いろと成絹紬を身に着ずして元結座の様にの外へさし
と作事して髪に針さし白粉を付けきてわれから
伏見よりハ文をあつく自ら書て貪着なきものゝ如く能て繁栄
末々人を厭ふ手に墨をつけて往来ハ沖の心の如く
智てつねハ家を憂へて毎に身を固くとすべて八畳を守る
数を書き綴る事なきハ女の家ハ富を重ねて
茶比翼よく家を立て元男猫一疋飼ぬ
十露盤を取りて見て思ひて是を捨て寝間へし

110X
502
6